



宮崎大学学術情報リポジトリ

University of Miyazaki Academic Repository

へき地小中一貫校における教育内容と教育方法のスタンダード化：郷土を学ぶ「美郷科」を事例として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2014-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 押田, 貴久, 武井, 哲郎, Oshida, Takahisa, Takei, Tetsuro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/4823

へき地小中一貫校における教育内容と 教育方法のスタンダード化

－郷土を学ぶ「美郷科」を事例として－

押田貴久*・武井哲郎†

**Standardization of Educational Content and Methods in Rural Educational
Continuity from Primary through Early Secondary Level Schools
－ “Misato-Ka” that learns the Hometown as a case －**

Takahisa OSHIDA and Tetsuro TAKEI

I. はじめに

1998年の学習指導要領改訂と地方分権改革により、教育課程基準の大綱化・弾力化と学校の自主性・自律性がワンセット（中留編2005）になって進められる中で「総合的な学習の時間」を中心に、各学校におけるカリキュラムの開発・実施が求められている。各地域や学校の教育ニーズに応えるため、2003年度より「構造改革特別区域研究開発学校」（以下、「特区研発」とする）制度が導入され、学校教育法に示されている学校教育の目標等を踏まえつつ、学習指導要領等の基準によらない教育課程の編成・実施が可能となった。その後、特区研発は2008年度より「教育課程特例校制度」へ改変されている。このように各学校や自治体が独自にカリキュラムを開発・実施する「制度」が整備されてきた。

こうした制度変化を受け、東京都品川区では、小中一貫教育カリキュラムを作成するとともに「道徳」、「特別活動」、「総合的な学習の時間（総合）」を再編し、「市民科」という新たな教科を創設した。このほかにも富山県高岡市では、2006年度から小学校5・6年の「図画工作」及び「総合」の一部を、中学校1年では「総合」の一部を組み替え、「ものづくりデザイン科」を実施したり、熊本県宇土市では、2010年度から全市で小学校3年から6年まで「総合」の一部を組み替え、また、中学校1・2年で「総合」の一部を組み替え、「そろばんの時間」を実施したりと地域独自の取り組みを行っている。宮崎県内では、小学校英語ならびに小中高一貫教育が中心であるが、日向市や日南市、西都市、えびの市、串間市、美郷町において教育課程特例校制度を活用した地域や学校独自の取り組みを行っている。

一方で、地域や学校独自のカリキュラムが開発されても、持続性・継続性は大きな課題である。そうした学校における教育活動の持続性・継続性を阻害する要因として人事異動があげられる。とりわけ、へき地校の教職員は、へき地交流人事により短期間（宮崎県では3年）で異動となる。そのため個々に積み上げてきた教育実践が学校のカリキュラムとしてうまく引き継

* 宮崎大学大学院教育学研究科

† びわこ成蹊スポーツ大学

がれないという課題もある。

カリキュラム開発に関する先行研究として、田中ほか（2011）では生活科をはじめとする1990年代前後からの現在に至る教育課程開発の新しい動きを紹介し、『『教育特区』での研究開発学校の「企画・運営・評価が地域行政改革の視野の中で行われがちですが、教育的視点からの課題把握と解決方策の模索という視点をどう位置づけるかが大きな課題」と教育（学）的観点からの評価の必要性を指摘している。また根津（2012）は、研究開発学校並びに教育課程特例校制度の課題について、①認識不足、②説明不足、③指導不足の3点をあげ、日本型SBCD（「学校を基礎に置くカリキュラム開発」（School-Based Curriculum Development））の課題への方策として「資源の確保」が鍵を握ると指摘する。最大の資源は教職員であるが、カリキュラム開発ならびに実施・定着を担う条件とはいかなるものであろうか。

自治体のカリキュラム開発の個別事例に関しては、例えば、降旗直子（2009）が品川区の「市民科」の開発ならびに導入過程を明らかにしている。また押田貴久（2010）は品川区における「小中一貫教育」を事例に行政とりわけ指導主事の役割の検討を行っている。教育課程特例校制度を巡り、助川晃洋（2010）は、宮崎県内の小中一貫教育との動向を整理すると共に小林市の小中一貫教育課程における「こすす科」を事例とし、地域教育改革における教育課程特例校制度の活用可能性を検討している。小林市では当初特区開発の申請を進めていたが、文科省の指導を受け、教育課程特例校制度の申請を取り下げ、学習指導要領の枠内で「こすす科」の取り組みをはじめたことを明らかにし、制度を適用せず独自カリキュラムを導入することの可否について論じている。これらの研究は開発ならびに導入過程に焦点を当てており、定着するための方策に関する視点は弱い。

そこで本稿では、へき地小中一貫校において教育内容と教育方法をスタンダード化する工夫について、美郷町立美郷南学園¹⁾で取り組まれている「美郷科」を事例に検討を行う。美郷科を取り上げる理由としては、へき地校であるがために交流人事による教職員の流動性が高く、学校独自のカリキュラムを開発してもその定着が難しいのではないかと考えるからである。学校独自の取組みを定着させるための工夫とは何かを検討する上で、教職員の流動性が高い学校を事例とすることは有効だと言える。

（押田）

II. 宮崎県における「地域学」の導入と展開

2003年3月に策定された「宮崎の教育創造プラン」では、目指す子ども像として、「ふるさとを愛し、自分に自信と誇りを持つ子ども」と「夢や希望を抱き、社会に貢献する気概を持つ子ども」を掲げている。この目指す子ども像の具現化に向けて、「確かな力を基盤とした感動と感性の教育」を理念とする宮崎の教育を創造していくための視点の一つ目に「ふるさと宮崎を大切に教育の充実」が位置付けられた。そして、宮崎県教育委員会では、2005年度から幼児小中高の連携による一貫教育の推進を重点施策として取り組むことになる。さらに一貫教育を進めるため宮崎県、串間市、えびの市、西都市、美郷町で教育特区を申請することとなった。

特区申請書において、郷土愛や郷土への誇りを培う教科として、小・中・高等学校における「地域学」の新設が掲げられた²⁾。教科として指導するための基準（学習指導要領）が必要となり、2007年4月から特区申請の3市1町の教職員と県ならびに市町村教育委員会の指導主事に

より作成された³⁾。そのまとめが「学習指導のための要領・解説 - 地域学編 -」である。この要領・解説では「地域学とは、地域を学び、地域を通して自分の生き方について考える教科」としている。この地域学では、地域を「学びの対象」及び「学びの場」としてとらえ、児童生徒が、小・中・高等学校の12年間を見通した系統性・一貫性のある目標と内容にもとづいて、直接地域の「もの・人・こと」から学ぶという、既存の教科にない特性がある。多くの学校では、地域理解を図るための「ふるさと教育」を「総合的な学習の時間」の中で取り組んでいるが、系統性や一貫性の面で課題も指摘されている。また、自分の生き方や進路を主体的に考える「自分さがし」の視点も意識されていない。そこで、地域学では、①教育の質の向上、②ふるさと教育の推進、③キャリア教育の推進の三点を目指し、創設されたのである。

教科「地域学」の目標は、次の通りである。

地域の自然・環境、歴史・伝統、産業・生活等について、系統性・一貫性をもって学ばせ、地域の理解を深め、地域と自分に対する自信と誇りを育むとともに、地域の未来と自分の生き方を結び付け、生涯にわたってふるさとを愛する心と態度を育てる。

「ふるさと教育」と「キャリア教育」の二つの視点を併せたものが、小学校から高等学校までを貫く地域学のねらいとなっている。そして、このねらいのもと発達段階ごとの「目指す子ども像⁴⁾」と「自分さがし⁵⁾」の段階が設定され、それぞれの段階に応じた活動が示されている。

地域学の内容は、「自然・環境と自分」、「歴史・伝統と自分」、「産業・生活と自分」、「地域の未来と将来の自分」を積み上げていく形になる。特に最後の「地域の未来と将来の自分」の段階では、地域の現状や課題を総合的に理解し、地域の一員として地域の未来を創る資質や能力を育てることをねらいとしている。このように宮崎県の「地域学」は、単なるふるさと教育、地域学習にとどまらず、地域の未来と将来の自分を考える生き方・キャリア教育となっているのである。

この県教育委員会で作成した「地域学」をもとにして、教育特区を受け、(幼)小中(高)一貫教育に取り組む各市町教育委員会は「くしま学」、「さいと学」、「えびの学」、「美郷科」へとそれぞれの地域の実態に合わせた教科を創りあげていったのである。なお、学習指導要領の改訂を控えていたこともあり、宮崎県内では敢えて特区申請せずに学習指導要領の枠内で、総合的な学習の時間において「ふるさと教育」や「生き方・キャリア教育」を取り組む地域もあった。例えば、小林市では「こすもす科」として、カリキュラム開発を行い、独自のテキストも作成している。

(押田)

Ⅲ. 美郷町の概要と美郷南学園の創立

今回事例として取り上げる宮崎県東臼杵郡美郷町は、宮崎県の北部に位置する人口5,863人(2013年8月1日現在)の町である。2006年1月1日に南郷村・西郷村・北郷村の三村が合併し、新設された。美郷町の発足と同時に旧3村には地域自治区(南郷区・西郷区・北郷区)が設置されている(2013年12月31日までの予定)。美郷町の人口(旧三村合計数)は、国勢調査の結果

によると1960年19,410人、1980年10,709人、2010年は6,248人であり、この約50年間で13,000人程の減、減少率67.9%となっている。高齢化率は43.6%と高く、今後さらに上昇する見込みである。産業は、山地が90%を占めることもあり、農林業が中心である。

美郷町教育委員会では「美郷町の学校教育グランドデザイン」において、「5年先を見据えた小中一貫教育の充実に向けた取組と10年先を見据えた複式指導の充実に向けた取組の推進」を掲げている。そして、“美郷ならではの教育”の具現化に向け、「ふるさとを愛する心、誇りや自信～美郷科の実施」、「確かな学力～小中の一貫性・系統性のある指導」、「豊かな国際感覚～英会話科の実施」に取り組んでいる。

美郷町の学校は、幼稚園3園（南郷幼稚園、田代幼稚園、北郷幼稚園）、小学校4校（南郷小、田代小、北郷小、黒木小）、中学校3校（南郷中、西郷中、北郷中）である。このうち南郷幼稚園、南郷小と南郷中は美郷南学園として、幼小中一貫教育を実施している⁶⁾。

美郷南学園は、南郷区の4小学校（神門小、鬼神野小、渡川小、水清谷小）を統合し新設した南郷小と、南郷中、南郷幼稚園を併設し、2011年4月に創設した「施設一体型幼小中一貫校」である。幼児児童生徒数は130人（H24年度137人）、教職員数30人（同32）人である。

学校教育目標は「生涯にわたって自分の力で学び、豊かに生活できる南郷っ子の育成」であり、中期目標として「南郷ならではの幼小中一貫教育システムの確立」を掲げ、小規模のよさを生かしたきめ細かな指導体制、4-3-2制の導入（ブロック制・ファミリー制）、地域学「美郷科」の充実等に取り組んでいる。具体的には「9年間を見通した学力の定着・向上、進路目標の設定」に向け、「学習意欲の向上」（小中教諭による相互乗り入れ）、「基礎基本の定着」（児童生徒への個別指導）、「教科指導の工夫改善」（研修の充実）に努めている。

表1 中学校教諭による専門性を生かした小学校への支援

教科	対象学年	授業時間	内容
国語	6	5	国語科教諭のTTによる支援
算数	5・6	10	数学科教諭のTTによる支援
音楽	3・4・5・6	10	音楽教諭による専科授業
体育	5・6	6	保健体育科教諭授業及びTTによる支援
英会話	1～6	5	英語科教諭、ALTによる授業

出典：美郷南学園「平成24年度学校要覧」より抜粋

美郷南学園における幼小中一貫校の成果としては、（教職員一人一人の目が子どもたちに行き届き、細かい指導ができるちょうどよい規模であるという前提も踏まえつつ）「自尊感情の高まり」や「専科授業の効果（音楽科・体育科の技能向上）」、「授業乗り入れの効果（学力の向上）」、「コミュニケーション力の向上」などが指摘されている。一方で、閉校した4小学校区における地域との交流の減少や、地域行事との調整が課題となっている。

（押田）

Ⅳ. 「美郷科」のカリキュラム

それでは、郷土を学び、自身のキャリアについて考えるという地域学の趣旨をふまえ、いわゆる「へき地」とされる美郷町において、どのような教育内容および教育方法が構想されてきたのだろうか。以下では、美郷南学園の事例を中心に、美郷町における地域学の実践である「美郷科」の内容や構成について、その概要を記す⁷⁾。地域学「美郷科」は、美郷を学び、その学びをとおして自分の生き方について考える教科である。「ふるさと学習」を軸とし、環境・食育や国際理解、情報、福祉・キャリア教育など、総合的な学習の時間（と生活科）も含めた9年間のカリキュラムである。「地域の方の思いや願い」を大切に、保護者・地域と連携した学習となっているが、ただ単に、地域のひと・もの・ことを知る・学ぶだけではなく、9年間の総まとめとして9年生が美郷町への政策提言を「子ども議会」で行っている。なお、「美郷科」の詳細については、宮崎大学小中一貫教育支援研究プロジェクト編（2013）に示されているので、併せて参照されたい。

「美郷科」におけるキーコンセプトとして挙げられるのが、美郷町で生活する人々の「思いや願い」に触れるという点である。「美郷科」が設置された時に町の教育委員会で指導主事を務めていた美郷南学園の近藤教頭は、次のように述べる⁸⁾。

やっぱり（美郷科を）作る時にですね、「生き方を学ぶ」ということで作っているんですね。だから、それまでのふるさと学習って、ふるさとを知るところまでだったのかな、というのが（あり）…「生き方を学ぶ」ということで、必ず人とかかわりとか、人の思いや願い、ここで働いている人たち、何かを守ろうとしている人たちの思いや願いを常に意識した指導を（美郷科の中で）するということですね。

従来の「ふるさと学習」が地域の文化や歴史を「知る」ことにとどまっていたのと比較し、近藤教頭は、地域に生きる人々の「思いや願い」を意識した指導を行う点に、美郷科の特徴を見出している。実際に美郷南学園では、「美郷科」の重点目標として、「南郷の人々の思いや願い、工夫や努力を学び、分かったことを表現することができる」（3、4年）、「南郷の方たちの地域に対する思いや願いに気づくことができる」（5～7年）、「地域の特色や課題、様々な人々の思いや願いを理解するとともに、地域と自分とのかかわりや自分の生き方について考える」（9年）といった言葉が掲げられていた。子どもたちには、「思いや願い」を学ぶこと、「思いや願い」に気づくこと、そして「思いや願い」をふまえて「自分の生き方について考える」ことが求められており、郷土を学ぶことと自らのキャリアを見据えることが連続性を持って捉えられている。

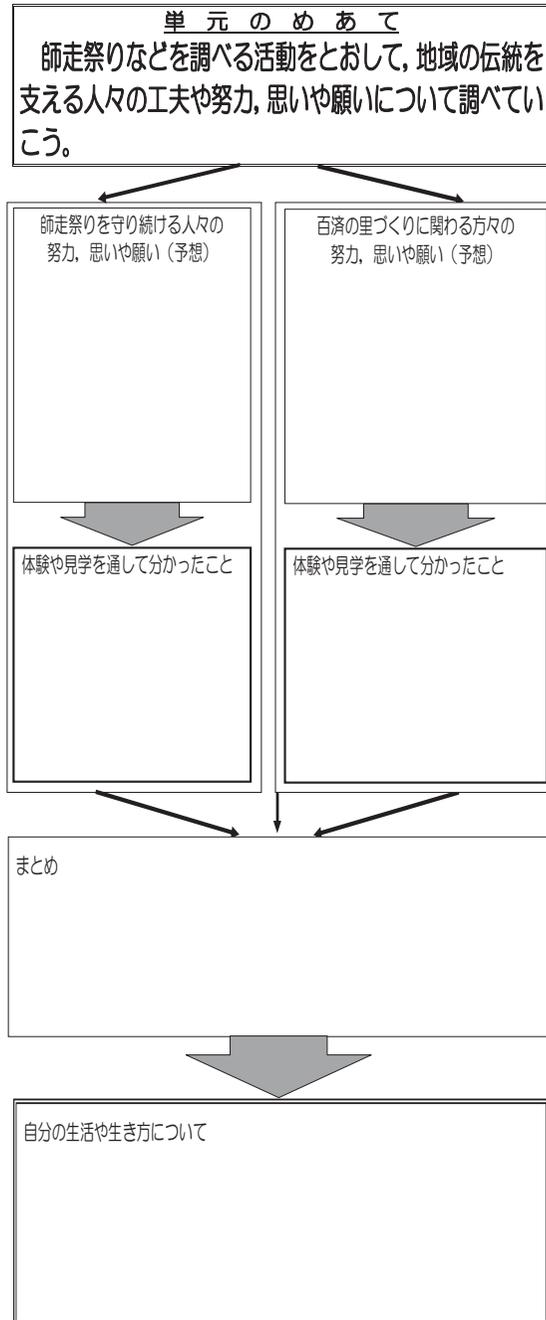
授業で扱われるテーマや内容を見ても、「思いや願い」に触れるという点が重視されている様子が窺える。次の図1は、6年生で行われている「地域の歴史や祭りを守り伝える人々」という単元の構成である。

図1 「地域の歴史や祭りを守り伝える人々」単元の展開例（美郷南学園提供資料）

対象学校	小学校		学 年	第5・6学年
単元名 (素材)	地域の伝説や祭りを守り伝える人々 (百済王伝説, 師走祭り, 西の正倉院, 百済の里づくり)		内 容 領 域	②歴史・伝統と自分
単元目標	関心・意欲・態度	地域の伝説や祭りについて調べる活動をとおして, 地域のよさを受け継ぎ, 伝えようとする態度を身に付ける。		
	思考判断	地域の伝説や祭りについて調べる活動をとおして, 地域の方々の地域に対する思いや願いに気付く。		
	技能表現	地域の伝説や祭りについて体験活動で得られた情報を, 自分の考えと結び付けて整理し, 分かりやすく表現する。		
	知識理解	地域の歴史・伝統について理解するとともに, 伝統を守り続ける人々の思いや願いについて理解する。		
単元の意図	本単元は, 地域の伝説や祭りについて体験活動などとおして調べ, 地域の過去から現在へのつながりや, 歴史や伝統の重みについて考えることをねらいとしている。 そのために, 集合学習での百済王伝説や師走祭りに関する学習, 西の正倉院や百済の館等に関する学習, 学習発表会における発表の3つの学習内容で構成する。			
ゲストティーチャー	西の正倉院ボランティアガイド 師走祭りや百済の里づくりを推進する方		総時間数	25時間
題 材	月	時 間	活 動	留 意 点
すごいぞ! 師走祭り	6月	1・2	<ul style="list-style-type: none"> 南郷区に伝わる百済王伝説や師走祭り, 観光施設などについて知っていることや経験したことをあげ, 本単元の学習について興味をもつ。 百済王伝説や師走祭りについて調べるための計画を立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 百済王伝説や師走祭りに対する関心を高め, 本単元の学習の意識付けを行う。 集合学習で合同学習を行った後学習した内容を発表するための計画を立てる。
師走祭りを調べよう	6月	3～6	<ul style="list-style-type: none"> 師走祭りを現在まで続けている地域の方の思いや願い, 工夫などについて話を聞く。 関わってきた方の祭りに対する思いや願いについて話を聞いたり, 質問したりすることによって気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> 本学習は, 高学年集合学習で実施する。 ボランティアガイドとの学習をとおして, 百済王伝説や韓国とのつながりについてより深く理解できるようにする。
百済の里づくりについて調べよう	7月	7～11	<ul style="list-style-type: none"> 西の正倉院, 百済の館の見学や説明を聞く活動を通して, 百済の里づくりに関わってきた方々は, どのような思いや願いを持っていたかを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 本学習も, 高学年集合学習で実施する。 師走祭りを続けていくための工夫や苦労などについて理解させるとともに, 児童が師走祭りや百済の里づくりに対する自分の考えをもてるようにする。
師走祭り・百済の里づくりを支える人々の思いや願いを伝えよう	10月	12	<ul style="list-style-type: none"> 百済の里づくりについて学習したことで自分の考えを結び付けて劇や研究発表をする計画を立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習したことをもとに劇づくりや研究発表を行い, 百済の里づくりを通して町を活性化させたいという思いや願いに気付かせる。 百済王伝説や師走祭りを現在に伝える方々の思いや願い, 児童の考えが表現されるように工夫させる。
		13～22	<ul style="list-style-type: none"> 劇や研究発表の準備を行う。 	
		23・24	<ul style="list-style-type: none"> 劇の発表や研究発表などを行う。 	
まとめ	12月	25	<ul style="list-style-type: none"> 学習のまとめを行う。 西郷区の御田祭, 北郷区の宇納間地藏祭りの話を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> 本単元の学習内容についてまとめるとともに, 西郷区・北郷区の祭りについて知らせ, 今後の学習への意欲をもたせる。

従来の「ふるさと学習」であれば、この単元に関しても、「地域の歴史・伝統について理解する」ことで十分だったのかもしれない。しかし、地域の文化や歴史を「知る」ことにとどまらない活動を目指す「美郷科」においては、「地域の歴史・伝統について理解するとともに、伝統を守り続ける人々の思いや願いについて理解する」ことを「単元目標」に掲げている。また、実際の活動内容を見ても、一般的には「師走祭り」や「百済の里づくり」そのものについて調べることが中心となるのに対して、「美郷科」においては、「師走祭りを現在まで続けている地域の方の思いや願い、工夫などについて話を聞く」ことや「百済の里づくりに関わってきた方々は、どのような思いや願いを持っていたかを考える」ことが重視されている。授業で用いるワークシート（図2）には、「思いや願い」を記入するスペースとともに、地域の人々の「思いや願い」をふまえて子どもたちが「自分の生活や生き方」について記入するスペースが準備されており、ここにも、郷土を学ぶことと自らのキャリアを見据えることが連続性を持って捉えられている様子を見て取ることができる。併せて、6年生以外の学習内容を見ても、3年生で「町の特産物を支える人々」、4年生で「地域の歴史・おどりの歴史を守る人々」、5年生で「地域の産業を支える人々」という単元が準備されており、「思いや願い」に触れるというコンセプトに沿って、いずれの単元も「人」に焦点を当てている点が特徴的であると言えよう。

図2 ワークシートの一例
(美郷南学園提供資料)



(武井)

V. スタンドアードの設定

「思いや願い」に触れるというコンセプトを掲げる「美郷科」においては、授業を展開させていくうえで、ゲスト・ティーチャーとして地域の人々からの協力を得なければならない。実際に、「美郷科」の多くの単元では、子どもたちに「思いや願い」を語ってもらう時間を設けており、教師用の指導資料の中にも、地域の人々の「思いや願い」が次のような形で示されている。

図3 教師用指導資料に示された「思いや願い」（一部抜粋、美郷南学園より提供）

- (3) 特産物直売所「いっつもや」で働く方々の思いや願い
- ② 南郷への思い
- 南郷で生産された「安心」「安全」なものをたくさん買ってほしいと願っている。南郷ならではの素晴らしい商品がいっぱいある。生産者にとっても、買うお客さんにとっても利益のある「いっつもや」になることを目指して、毎日働いている。
- (4) 事業所「鬼神グループ」の方々の思いや願い
- ③ ゆずドレッシングへの思い
- 地元の材料を使っていい商品を作り、鬼神野を宣伝したい。
- ④ 鬼神野への思い
- 鬼神野は空気・水・自然のきれいな住みやすいところだが、だんだん人が減ってきている。ここで、仕事（産業）を作って、人が生活できるようになったらいい。

図3は、「町の特産物を支える人々」（小学校3年生）という単元で示された「思いや願い」である。「美郷科」の学習において地域の人々の「思いや願い」に触れることが求められているのはむろん子どもたちであるが、指導資料のなかで簡潔にまとめられているため、教師たちは実際の授業に入る前に「町の特産物を支える人々」の「思いや願い」を知ることができる。なぜ指導資料のなかに「思いや願い」を載せているのか、近藤教頭は次のように述べる。

このように残していかないと、(先生方には) わからないということで。…実際にこういう人に聞きにいきます、この人たちはこういう思いや願いを持っていますというのも、先生方が指導する前にこれを読んで、それで打ち合わせをするというような紙上になっております。

ここで注目したいのは、指導資料に載せておかなければ、教師たちには地域の人々の「思いや願い」が「わからない」と認識されている点である。美郷町の小・中学校はへき地指定を受けているため、教職員の多くが3年で異動する。それゆえ、「美郷科」で指導する内容に全く変更はなくとも、教師たちが、美郷町で生活する人々の「思いや願い」を知る機会は少ない。どこに重点を置いて指導を行えばよいのか、授業に入る前に教師たちがイメージを持てるよう、

指導資料のなかに「思いや願い」を「残して」おかねばならないのだと言える。美郷科の実践においては、現在でも単元ごとに「ふり返り表」というものが作られ、授業を担当した教師が、「1. 人材・場所（誰・どこに連絡が必要ですか）」、「2. バスの利用（いつごろに連絡が必要ですか）」、「3. 時数（計画に無理はありませんか）」、「4. その他（指導していて困ったことや、計画を変更して指導したことはありませんか）」という四つの項目について記録を残す体制となっている。例えば「1. 人材・場所」の欄には、授業に協力してもらう地域の人々の連絡先とともに、「年度当初に連絡をとり、ご挨拶と本年度の計画（3回の活動）をお話しし、お願いをしておく」という注意点が記されるなど、次年度への引き継ぎが強く意識されていると言えよう。

教師用の指導資料には他にも、一単位時間ごとの学習指導計画やワークシートの例がまとめられており、これらは、2008～2009年度の2年間をかけて、南郷区（美郷町の一地区）の全教職員が所属する「南郷区教育研究会」で作成されたものだという。むろん、これだけの指導資料が準備されているからと言って、教師が、一単位時間ごとの学習指導計画をそのまま遂行する必要はない。実際に、5年生の「地域の産業を支える人々」という単元を担当した教師は、「水清谷の南高梅」をPRするためのパンフレットの作成という、従来の計画にはなかった活動を付け加え、独自のアレンジを行っている⁹⁾。しかし、へき地ゆえに教職員の入れ替わりが激しく、「初めて（美郷町に異動して）きた方は、何をどうしていいかわからない」（山本教頭）ことが予想される以上、町として指導資料を充実・発展させていくことは必要不可欠だと言える。単元の展開例や一単位時間ごとの学習指導計画などによって、教育内容および教育方法の面でスタンダードを設定し、地域の人々の「思いや願い」に触れるというキーコンセプトを継承しようと努めていることが見て取れよう。

（武井）

VI. 結語

本稿では、へき地小中一貫校において教育内容と教育方法をスタンダード化する工夫について、美郷町立美郷南学園を事例に検討してきた。地域や学校独自のカリキュラムを定着させるためには、学習指導要領や指導書、教科書等の教材や教具などの資源の充実が欠かせない。特に教職員の流動性が高い地域では、より重要性が増してくる。但し、単なるモノやマニュアルが整備されればよいとは限らない。

今回事例として取り上げた「美郷科」におけるキーコンセプトは、美郷町で生活する人々の「思いや願い」に触れるという点にある。それは単なる地域学習としてのふるさと教育ではなく、子どもたちには、「思いや願い」を学ぶこと、「思いや願い」に気づくこと、そして「思いや願い」をふまえて「自分の生き方について考える」ことが求められており、郷土を学ぶことと自らのキャリアを見据えることの連続性がそこには込められているのである。

そのためにも教科のねらいを指導資料に明記していかなければ、地域の人々の「思いや願い」は教職員に理解されず、引き継がれないおそれがある。担当する学級担任等の「思いや願い」だけでは美郷科はつながっていかないのである。美郷町の小・中学校はへき地指定（二級）を受けているため、教職員の多くが交流人事により3年で異動となる。それゆえ、「美郷科」で指導する内容に全く変更はなくとも、教職員が、美郷町で生活する人々の「思いや願い」を知る

機会は少ない。どこに重点を置いて指導を行えばよいのか、授業に入る前に教職員がイメージを持てるよう、指導資料のなかに「思いや願い」を「残して」おかねばならないのだと言える。

美郷科の実践においては、現在でも単元ごとに「ふり返り表」というものが作られ、授業を担当した教職員が記録を残す体制となっている。また、職員室の掲示板には、総合的な学習の時間・生活科・美郷科の「年間活動計画」が大きく掲示され、次年度に向けた反省が朱書きされている（写真1）。

学年	単元名	総合的な学習の時間・美郷科 <中期ブロック>											
		1学期						2学期					
3		4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	
中期	米づくり			<2H> 授業									
5	米づくりに携わろう <45H>	<2H> オリエンテーション 美郷の米作り	<3H> 米づくりの調べ学習	<2H> 米づくりの調べ学習 (7H)	<2H> 米づくりの調べ学習 (4H)	<3H> 米づくりの調べ学習 (4H)							
	南高梅<25H>		<1H> 南高梅と美郷	<2H> 南高梅と美郷	<3H> 南高梅と美郷								
	南郷と鹿児島を比べよう <25H>		<1H> 南郷と鹿児島	<2H> 南郷と鹿児島	<3H> 南郷と鹿児島								

写真1 職員室の美郷科の「年間活動計画」

このように職員室へ掲示し、適宜書き込んでいくことにより、「美郷科」の活動状況が教職員全体へ共有され、さらなる工夫改善へとつながっていくのである。

なお、本稿では美郷南学園における「美郷科」の事例を取り上げたが、美郷町内の他校や他のへき地小中一貫校等との比較検討が必要であろう。この点は今後の研究課題としたい。

(押田)

註・参考文献

- 1) 筆者らは2013年2月4日に美郷南学園へ訪問し、授業並びに校内観察、小中両教頭へのインタビュー調査を行った。
- 2) 『構造改革特別区域計画』より。他には「英語によるコミュニケーション能力の育成」として小学校における「英会話科」(新教科)並びに中学校における「英語表現又は英会話科」と「基礎・基本の定着と主体的な学習態度の育成」として、小学校高学年における「選択教科」があげられていた。
- 3) 「地域学」の作成ならびに内容の詳細については、宮崎大学小中一貫教育支援研究プロジェクト編(2013)に示されているので、併せて参照されたい。
- 4) 小学校低学年では「地域の様子を興味・関心をもって語れる児童」、小学校中学年では「地域のよさを情報にもとづいて語れる児童」、小学校高学年では「地域の大切さを経験にもとづいて語れる児童」、

中学校では「地域の未来を根拠にもとづき自分の言葉で語れる生徒」、高等学校では「地域の未来と自分の生き方を結び付けて語れる生徒」となっている。

- 5) 「地域に出会う段階」、「地域の中の自分に気付く段階」、「自分の中に地域を育む段階」
- 6) 西郷区と北郷区の各学校は連携型の一貫教育に取り組んでいる。
- 7) 「美郷科」は構造改革特別区域制度を活用して2008年4月に設置されたが、当初は、小学校1・2年生の生活科、そして小学校3年生以上の総合的な学習の時間を削減することで、小学校1・2年生で年間15時間、小学校3年生以上で年間25時間実施されていた。現在は、独自の教科としては設置されておらず、生活科および総合的な学習の時間の一部として実施されている。
- 8) 以下、引用文中の「…」は省略を（ ）内は筆者による補足を意味する。
- 9) この実践については、宮崎大学小中一貫教育支援研究プロジェクト編（2013）の第3章に詳述されている。

押田貴久（2010）「カリキュラム開発における指導主事の役割 - 品川区を事例に -」（『東京大学大学院教育学研究科教育行政学論叢』第29号、pp.1-7）

助川晃洋（2010）「宮崎県小林市の小中一貫教育課程における「こすもす科」の位置づけ - 地域教育改革における教育課程特例校制度の活用可能性の検討に向けて」（『宮崎大学教育文化学部紀要・教育科学』第22号、pp.1-13）

田中耕治・水原克敏・三石初雄・西岡加名恵（2011）『新しい時代の教育課程 [第3版]』有斐閣

中留武昭編（2005）『カリキュラムマネジメントの定着過程』教育開発研究所

根津朋美（2012）「カリキュラム開発」（篠原清昭編著『学校改善マネジメント』ミネルヴァ書房、pp.180-195）

降旗直子（2009）「市民科の創設過程」（小川正人編集代表／品川区教育政策研究会編『検証教育改革 - 品川区の学校選択制・学校評価・学力定着度調査・小中一貫教育・市民科 -』、教育出版、pp.129-136）

美郷町立美郷南学園（2012）『平成24年度学校経営案』

美郷町立美郷南学園（2012）『平成24年度学校要覧』

宮崎県・串間市・西都市・えびの市・東臼杵郡美郷町（2007）『構造改革特別区域計画』

宮崎県教育委員会（2007）『学習指導のための要領・解説 - 地域学編 -』

宮崎大学小中一貫教育支援研究プロジェクト編（2013）『小中一貫・連携教育の理念と実践 - 「美郷科カリキュラム」の実践 -』東洋館出版社

文部科学省 教育課程特例校制度 HP:http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokureikou/index.htm（最終アクセス2013年10月7日）

【付記】本研究は、JSPS科研費 24830103の助成を受けたものです。

（2013年10月8日受理）